お寺の子ども会 西教寺進徳日曜学校 だより

西教寺蔵本通支坊 2013.10.12 呉市中央 7-7-13　TEL 21-2798 E-mail:nikkou@saikyoji.net

いのちを支え育てるもの

親の思うとおり、言う通り子どもは育ってくれませんね。子育てって難しいです。だから私はエラそうに子育てについて書けるような立場ではありませんが、今年、広島仏教学院にお坊さんになろうと入学したAくんがこんな話をしてくれました。

Aくんはひどく荒れた生活をしていたそうで、「警察署以外で親に会ったことがなかった」そうです（驚）。そんな彼がどうしてお坊さんを志すほど変わったのか尋ねると、次のように話してくれました。

すさんだ毎日を送るうち、人生に虚しさを感じはじめ、「人生何をやったって意味なんかない」と虚無主義に陥ったそうです。そしていよいよ最後に「生きていたって意味はない」と自死を考えていた頃、お父さんに街でばったり会ったのだそうです。当時は家にも帰らず捜索願いが出されていたそうで、Aくんは「ばったり」と言いましたが、きっとお父さんは必死で捜しておられたのでしょう。Aくんは「その時のお父さんの顔」を見て、「ああ、と思って変わった」と言うのです。

私は厚かましくも、その「ああ」と思ったって、どう思ったのか聞かせてほしいとお願いしました。すると、「やっぱり親なんじゃと思った」ということでした。

「やっぱり親なんじゃ」って、どんな思いなのかしつこく尋ねると、「顔を合わせればケンカ、また話をすればいつもぶつかって、クソオヤジとしか思ってなかったけど、それでもお父さんは自分のことを心から心配しているんだ」と思ったというのです。

言葉にすればお互いにぶつかってしまうけれども、言葉の底にあるお父さんの思いが、お父さんのその「表情」に現れていたのでしょう。Aくんは、自分自身さえも見捨てようとしたその自分を、心の底から大事に思い、心配してくれているお父さんの愛情、言葉では表せない「暖かさ」に出遇ったということではないでしょか。

カウンセリングでは、相談者が（ここではAくんが）建設的な方向に変化するための援助者（ここではお父さん）の条件として、無条件の受容とか共感的理解が大事といい、ああしなさいこうしなさいという援助者の価値観の押しつけは、成長を阻害することの方が多いと指摘します。しかし、私にも子どもがいて、時々そのことを思うのですが、「分かっちゃいるけど」言わずにはおられません。理屈も事実もそうであったとしても、言わずにおれないのが親というものです。それで私も子どもに嫌われているのですが、このたびAくんの話を聞いて思ったのは、Aくんのいのちを支え、そして変化を導いたものは、「自分は大切に思われているという暖かさ」でした。人は、表面的にはぶつかってばかりだとしても、深いところで「自分は大事に思われている」という実感があれば、自ら足をふんばり、成長してゆくのだということです。親としてあれこれ言うこともさることながら、そっちが伝わっているか（そっちを伝えること）を忘れてはならないと思ったことです。

秋の食べ物、ひらがな、漢字、お絵かき大会。今見たらさんまは「秋刀魚」のまちがいですね。

お念仏も同様、南無阿弥陀仏申すところにその「暖かさ（大悲）」を感じ、経験しつつ生きてゆくことだと思います。

次回、お寺の子ども会は、11月10日（日）14時～15時半やきいも大会します。

皆さんお誘い合わせご参加ご予定下さい。